

## 【シンポジウム】

## 「バレーボール活動を通じた国際交流～大学の現状と今後の課題」

吉田清司氏（専修大学）の司会により、オクム氏と事例報告を行った3名のシンポジストが登壇し、フロアの参加者の質問に応答する形でディスカッションがなされた。

オクム氏の英語を、海外での豊富な支援活動経験を有する重田氏（京都外国語大学 4年）が要点をまとめて翻訳し、会場から拍手が生まれる等、終始和やかな雰囲気の中でのシンポジウムとなった。



## Q1.

「オクム氏が関わっている博多女子高校における指導と、他の日本の高校との違いとして、どのようなものが挙げられるか？」

## オクム：

まず第一に、私は日本の伝統的なこれまでの指導者の方たちに、敬意を表していることをお伝えしておきたい。その中で、私が提案する新しい観点からの指導法は、これまでの伝統的なやり方との間に意見の相違が起こるので、そのバランスをどのように保つかということが重要だと考えている。博多女子高校の場合は、これまでの伝統的な指導法にとらわれず、新しい観点や方法を積極的に取り入れることに意欲的である。どのチームにとっても言えることだが、そのような柔軟性がチームの可能性を決め、最終的な成績につながっていくのだと考えている。

## Q2.

「強いチームを作るために国際的な強化試合を行うことと、グラスルーツレベルでの国際交流活動との関係性は？」

## オクム：

国際交流に関しては、やはり強化というよりも、人と人との関わりということが非常に大切になってくると思う。小さな頃からそういった国際交流の経験をさせてあげることで、将来的にその経験が、例えば代表レベルの選手になった時に生きてくる。子供たちにそうした国際交流の得難い経験をさせてあげるのは、我々大人の役割ではないだろうか。

## 佐藤：

私の方針として、勝ち負けよりも人間的な成長の部分を重視すべきだと思って、バレーボールに携わっている。そのため、強化を重視した試合であれ国際交流であれ、双方に理解と合意のある形でパートナーシップが結べている限りは、有意義な交流になると思っている。勝敗を争う中で競技力の向上が見込め

る側面もあるが、その交流試合が選手たちに素晴らしい経験と学びをもたらす、というところを大切にしたい。

**内田：**

今回、いくつかの大学に声を掛けたが、やはり様々な事情で断られることも多かった、私としては、競技力以上に、国際交流で得られる経験や人としての成長を大切にして欲しいと思っている。もっと多くの大学が理解と協力を示してくれると、さらなる国際交流が実現できると思っている。

**重田：**

トッププレイヤーを養成するような強化の方向と、野球やバレーのルールも知らないような子供たちにそのスポーツを紹介するという草の根の活動があり、直接的に結びつくものではないかもしれないが、両者を並行して行っていくことが重要だと考えている。

**Q3.**

現在ではあまり多くはない、今日の事例のような国際交流を、今後全国的に広めていくために必要だと考えられることは？

**佐藤：**

文科省等、国がそうした制度をきちんと整備してくれるのが理想だが、NCAA（全米体育協）の日本版や、大学における国際交流を視野に入れた機関の設置の動き等もあるようなので、そうした動きと連動しながら、我々教員が学生のモチベーションを高める努力をしていくことが必要だと考えている。

**内田：**

バレーボールが強い弱いということだけでなく、国際的な交流の価値そのものの意義を、もっと多くの人に知ってもらいたい。それは、例えば一日、半日の活動でも構わないと思っている。今後も、そうした国際交流における世界との橋渡しの役割を、私の出来る範囲で担っていきたい。

**重田：**

野球が専門でまだ学生の自分のような人間でも、バレーボールを通じた国際交流で様々な貢献が出来るのだということを、少しでも広めてもらえたら嬉しい。それが刺激になり、興味や関心を持ってもらうことができれば、また新たな活動が生まれていくのではないかな。

**オクム：**

現段階で国際交流に興味のない人たちに対しても、今日の事例報告のような活動を知ってもらうことで、広く国際交流が生まれていく契機になるのではないかなと思う。バレーボールを通じて、世界が繋がっていくことを願っている。